Le Roman de Renart 関係新刊二著

原　野　　昇

『狐物語』研究の分野で重要な著作が最近相次いで刊行された。

1. Kenneth VARTY, *The Roman de Renart, A Guide to Scholarly Work*, Lanham, Maryland (Scarecrow Press), U.S.A., 1998.

著者の Varty 氏は国際動物叙事詩学会 Société Internationale Renardienne の創設者であり名誉会長でもある。氏は『狐物語』，ファブリオ，動物寓話の研究者を集め，1975 年に第一回の Colloque International de l'Epopée animale, Fable et Fabliau を Glasgow 大学で開催された。以後この会議は隔年にヨーロッパ各地で開催され続け，1995 年にドイツの Düsseldorf で開催された第 11 回大会と，1997 年にイタリアのトリノで開催された第 12 回大会の中間の 1996 年には，東京の慶應義塾大学で特別大会が開催された。 Varty 氏はこの学会が扱う分野の研究動向に常に目を光らせ状況を把握されているが，その中の『狐物語』に関するものを網羅し，上記の書物にまとめて出版された。かなり以前からその出版が予告されていたので，研究者の間ではその実現が待望されていたものである。

全体は 1. The *Roman de Renart* and Its Manuscripts, 2. Editions, 3. Translations and Adaptations, 4. Critical Studies の 4 部からなり，最後に種々の索引が付されている。何と言っても圧巻は 4 の Critical Studies で，研究者のアルファベット順に 600 点近い文献があげられており，そのほとんどに Varty 氏のコメントが付されている。（著者未見の文献には＊印がつけられている）また各誌の書評で取り上げられた文献には，その書評についても文献ごとに，評者と書評掲載誌が列挙されている。

この種ものとしては，Grant & Cutler 社から出ている Research Bibliographies and Checklists シリーズが有名であり，現在まで中世フランス文学関係では，Chanson de Roland (Joseph J. DUGGAN), Chrétien de Troyes (Douglas KELLY), Tristan (David J. SHIRT), Marie de France (Glyn S. BURGESS), Aucassin et Nicolette (Barbara Nelson SARGENT-BAUR & Robert Francis COOK)が出ており，いずれも非常に便利で重宝がられている。『狐物語』もようやくこれらの仲間入りしたことになる。なお Villon に関しては，Garland Medieval Bibliographie シリーズの 1 巻として，Robert D. PECKHAM, *François Villon : A Bibliography*, 1990 が出ている。

1987 年に出版された Micheline de COMBARIEU DU GRES & Jean SUBRENAT, *Le Roman de Renart*, Index des thèmes et des personnages, Aix-en-Provence (Publications du C.U.E.R.M.A)と並んで，『狐物語』研究の「道具」がかなり整備されたことになる。

2. *Le Roman de Renart*, édition publiée sous la direction d'Armand STRUBEL, avec la collaboration de Roger BELLON, Dominique BOUTET et Sylvie LEFEVRE, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1998.

フランス中世文学作品の校訂本を体系的に出している collections としては，Société des Anciens Textes Français (SATF, Champion→Picard), Clasiques Français du Moyen Age (CFMA, Champion), Textes Littéraires Français (TLF, Droz)があり，文学作品の権威ある刊本を出している Pléiade 叢書には，中世作品の本格的な校訂本は長く入っていなかった。わずかに Albert PAUPHILET による，*Jeux et sapience du Moyen Age*, 1951; *Poètes et romanciers du Moyen Age*, 1952; *Historiens et chroniqueurs du Moyen Age*, 1952 の 3 部作があるのみであった。しかもこれらは写本に基づく正確な校訂本をめざしたものではなく，どちらかと言えば中世文学の全体像を紹介することに重きが置かれていた。

その意味では，中世作品の本格的な校訂本として Pléiade 叢書に入ったのは 1994 年に出た Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, édition publiée sous la direction de Daniel POIRION, avec la collaboration d'Anne BERTHELOT, Peter F. DEBOWSKI, Sylvie LEFEVRE, Karl D. UITTI et Philippe WALTER が最初と言ってよかろう。続いて翌 1995 年には *Tristan et Yseut*, édition publiée sous la direction de Chritiane MARCHELLO-NIZIA, avec la collaboration de Régis BOYER, Danielle BUSCHINGER, André CREPIN, Mireille DEMAULES, René PERENNEC, Daniel POIRION, Jacqueline RISSET, Ian SHORT, Wolfgang SPIEWOK et Hana VOISINE-JECHOVA が出た。後者においては，発見されて間がなかったカーライル断片写本が早速校訂収録されて話題を呼んだ。このたびの *Le Roman de Renart* は中世作品の校訂本の第 3 弾ということになる。

『狐物語』の校訂本としては，1826 年に刊行された MEON 版を別にすれば，MARTIN 版，ROQUES 版，FUKUMOTO-HARANO-SUZUKI 版に続く 4 番目のものである。 MARTIN 版が A 写本を中心とする α 系統の，ROQUES 版が B 写本を中心とする β 系統の，FUKUMOTO-HARANO-SUZUKI 版が C 写本を中心とする γ 系統の校訂本であったのに対し，このたびの Pléiade 版は基底写本として H 写本（Paris, Arsenal 3334）を選んでいる。H 写本は α，β，γ のいずれのグループにも分類しがたく，混成的性格の composite 写本として位置づけられている。その意味では 4 つの校訂本は，それぞれに固有の意義がある。

H 写本は枝篇によって α に近かったり，β に近かったり，γ に近かったり，またそのいずれでもなかったりするので，調整基準写本 manuscrit de contrôle の選定が難しいが，総合的に判断して C 写本を調整基準写本として利用している。

全体の構成は他の場合と同様に，Introduction，本文，Notice, notes et variantes の 3 部構成である。本文として，（1）H 写本に基づく諸枝篇，（2）その他の枝篇，（3）『狐物語』関連作品，の 3 種類のテクストを収録してある。

（2）は H 写本にはない『狐物語』の諸枝篇である。その際の基底写本としては L 写本が選ばれている。（ただし，第 XXIII 枝篇 Renart magicien は M 写本にしかないので，M 写本によっている。）その理由は既存の 3 つの校訂本で扱われていない写本のテクストを紹介したいということである。

（3）に関しては，先行の *Tristan et Yseut* でも Eilhart d'Oberg や Gottfried de Strasbourg の作品のみでなく，*La Saga de Tristram et d'Isönd* や *Sire Tritrem* なども現代フランス語訳で幅広く収録

していた。今回も『狐物語』以外の作品で，Rutebeuf, *Renart bestourné* や *Le Couronnement de Renart*（一部）が収録されているのみでなく，今まで『狐物語』と一緒にはあまり紹介されなかった Philippe de Novare, *Mémoires*（一部）や，精神において『狐物語』と通じるところのあるいくつかの dits などが収録・紹介され，本書の特徴となっている。作品のタイトルに Renart の名前がついていても，*Renart le Nouvel* や *Renart le Contrefait* などの "grandes machines allégoriques"は，作品の精神において共通性が薄いので，本書には収録されていない。

本文は本叢書の先行２著と同様に，現代フランス語訳が上段に，それに対応する ancien français のテクストが下段に，少し小さい文字で印刷されている，いわゆる édition bilingue である。

巻末には先行２著と同様に，Répertoire と称する用語解説が付されており，文学史上の専門用語（branche, merveilleux, zoomorphisme, etc.），時代背景（abbaye, ferme, forestier, ordalie, prévot, bailli, calendrier, etc.），テーマ（faim, escondit, raillerie, etc.），登場人物（Brun, Isengrin, Noble, Fière, Primaut, etc.）などが取り上げられて，読者の便に供されている。

本書について難点を言えば，枝篇名にローマ数字を用いて H 写本に収録されている枝篇の順番に I, II, III...と番号を付したことである。枝篇の呼び方は『狐物語』研究者の間で大きな問題であり，ROQUES が MARTIN と異なる枝篇番号をローマ数字で呼んだことで，非常に厄介な問題となっている。しかし最近は MARTIN 版の枝篇番号をローマ数字で表記し，それをもって各枝篇を呼ぶやり方が定着しつつある。すなわち「第４枝篇 branche IV」と言えば「井戸に落ちたルナール Renart dans le puits」を指すのである。事実本書でも，本文（２）の H 写本にない枝篇では MARTIN 版の枝篇番号で L 写本のテクストを呼んでいる。Notes など随所で当該枝篇は MARTIN の～枝篇に相当するとか，Bibliographie などにおいて，論文のタイトルの中に MARTIN 版の枝篇番号で示されているものがあると，本書（H 写本）の～枝篇に相当すると注釈が付してはあるが，枝篇名をめぐる混乱に拍車をかけたことは間違いない。H 写本の枝篇を算用数字で示して，それぞれが MARTIN 版のどの枝篇に相当するかをローマ数字で示せば，全く問題なかったのである。惜しまれてならない。

最初に「本格的な校訂本」と書いたように，H 写本を基底写本とし，H 写本の読みを退けて採用しなかった箇所には，その根拠とともに注で示しているし，passages discutés にも必要な注を付すなど，信頼できる校訂本になっている。しかし純粋に研究用の校訂本という面からいうと，注文すべき点も少なくない。例えば ancien français のテクストに foliotation がなく注にまわされているので，テクストを読んでいる途中でただちに写本に当たってみたい場合など，かなり時間がかかる。しかし本叢書の性格からして édition bilingue にせざるをえないし，研究者にとっての便宜は多少割愛せざるをえないであろう。

細かい点であるが，LXXIII ページ３行目で，『狐物語』を伝える現存写本として 14 の写本と並んで "et seize fragments affectés des lettres minuscules *a à q*"とあるが，その後 *r, s, t* という３つの断片写本が発見されているので，"dix-neuf fragments ... *a à t*"としなければならない。３つの断片写本とも発見が報告されて 15 年以上になり，1983 年に刊行された FUKUMOTO-HARANO-SUZUKI 版でも紹介されているのに，20 年以上前の記述が踏襲されているのは残念である。